

善因庄

1754

22



善因庄

第壹槽太鼓成田仇討 七幕

(序幕)上總長南道場の場(同)奥座敷庭先の場  
 (武幕目)阿部家下郎の場(同)家中宮田宅の場  
 (同)茶の間普請の場(三幕目)茨城権現社頭の場  
 (同)返し相撲興行土俵の場(四幕目)奥州白石在雲ノ戸内の場(同)街道長繩手の場(五幕目)備前岡山千歳屋の場(同)小松堤三味の場(六幕目)武州江戸麴町の場(同)綾川内勘當の場(七幕目)下總國成田敵討の場

中幕 須摩浦凱歌謠曲 貳幕

(中幕口)船越開道の場(同)須摩の浦の場(中幕切)忠澄陣所物語の場(同)庭先の場

宮田朝之丞 片岡我童  
 雲の戸十右衛門 同  
 太神樂鶴の丸鶴太夫 同  
 忠藏妹おどせ 澤村源之助  
 六彌太妻深谷 同  
 藝妓小春 同  
 白酒賣お三保 同

中村求女	海上伊織	酒屋嘉七	真鶴屋三郎	阿部の奥方	白酒賣お松	雲の戸十次郎	忠度の室菊の前	綾川女房お縫	脇坂次郎右衛門	相撲呼出し清吉	平山武者所	高村善太夫	栗野無苦庵	明石音藏	宮田の中間	呼出の奴	後家酒屋おむつ	腰元長篠	仲居おせいの	大工棟梁お兵衛	人足廻茂次兵衛	豊島五郎次	千歳屋才助	越中郎盛次	曲金鉄藏		
中	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
村鶴五郎	村かろ	川権十郎	東秀調	川照藏	谷門藏	村新太郎	東喜知六	中村歌女之丞	東綾女	川園六	川市友	村芝壽郎	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
市川今平	片岡九童	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

第貳槽目(序幕)本舞臺都て脇坂道場稽古場の体爰(下女)

(門第)を相手よ柔術の稽古をして居る(お種)出コレお保田御門弟を捕へチトたしなんだがよい(下)夫でも私の事を御弟子衆が何のりのと(種)ハテだまつて居やいのト(脇坂)出コレ娘い、下女迄が稽古場へ立寄るみだら千方奥へ参を下(下)遣入(種)私しも(脇)娘そちの暫く是ト思入有て何門衆衆最早夕陽なき心(皆)然らむ先生又明日ト遣入(種)父上さま私へ御用とい(脇)外でもかいが父の當國の城主阿部對馬守の藩中よて柔術の指南番たりしが朋友の識よ浪人なせど重役富田朝右衛門病死せし故そちが兄朝之丞を養子よ遣わし妹のそちよのよい鯉をと思ふ折柄我甥たる中村求女秋田從我を便り参りし故丁度似合の鯉と内へ置様子を見よば身持放婚伯父が立腹致シ居るとそち從得と申が能ト仕打有て遣入(種)求女様が私をお嫌ひ被成るも無理とい思わねど父上のお心休お放

婚を直したい物じやちト思入(大八)出其放隋の直り升まへ(種)そんなら此場の様子を(大)へイ開升たが求女様の新町のお花といふ狐よ夫婦約束私も御恩よ成た師匠の養子よ被成求女さま故御意見を致し升たがむだか事夫從の正直此大八を鯉よ被成てのト(種)を口説詞爰有て(大)期う云出シたら脇付ても抱て寝るト追廻す(下)出是を隔てる(種)逃て遣入(大)イヤお保田邪魔を仕たか(下)邪魔をしたとい胸欲お前のおアト(大)を口説詞爰有てト、抱付を突倒シ遣入(下)アノ爰お戀知らずめト云乍遣入(大)出とふぞして娘を手よ入る工風がト思入向う從(求女)出不斗した事柄身の放婚定て伯父上の御立腹(大)モシ求女さん居續といひどいじやアねへり(求)サア歸りそびきた故こなたよ託言を(大)をふして先生の中よの御腹立故急うの事よ(求)テモ馴ぬ土地故差當ッて行所が(大)私も近付がかけきわおきたの御世話ト思入有て新町へ

私もお嫌ひ被成るも無理とい思わねど父上のお心休お放

遊びも行って居ると勸る詞堂有て(脇)大八の居らぬかト出  
(大)へい何ぞ御用でム升るか(脇)只今門内へ犬が這入た  
様子トヤのト思入(大)へいあの犬の今這出し升た(脇)イ  
ヤ這出しての定て路頭も迷ふで有ふト犬又警へ意見の詞  
堂有て這入(求)仕打有てモシ伯父上今從急度心を改め升  
る(大)マア今夜の兎も角も私の部屋へ(求)何柄何迄そか  
たの深筋森ヒト這入(大)思入有て求女を這出シ聲も成ら  
と思ひの外娘の俺を刺付る又老ぼさの求女も情が有柄の  
みいつア一番手短ムト思入此様宜敷道具廻る  
本舞臺都て慶所の体獨吟も成(脇)出最前の意見で少しの  
目が覺るで有う併身が居ての這入よくからムドレペリを  
明て置て這升ラト思入有て這入(大)伺ひ出傳書の一巻奪  
取懸の意恨を晴して呉んと慶所へ忍び入一巻を盗取(種)  
を切殺ス(種)アツト苦しむ聲も(脇)出おのま盗賊とト切  
て掛る(大)一寸立廻り松ケ枝へ逃ケ登る(脇)追て行(忠)

走出堀越も鎧もて(脇)を突(求)おのま曲者ト立寄り見て  
ヤコリヤ伯父上をト思入有て堀を乗越る(下)出(種)を  
見て(下)コリヤお嬢さまがト震へる此様宜敷道具廻  
本舞臺都て脇坂宅堀外の体爰も(求)おのま曲者ト(大)を  
引戻し一寸立廻つて(大)逃て這入(求)追欠行向う從忠藏  
(出)求も行當り一寸立廻り(忠)脇の死體も爪付見て  
(忠)コリヤ大旦那がト此様宜敷敷幕  
(武幕目)本舞臺都て阿部家書院の体爰も(大)六人酒を  
香乍(種)四人酌を仕乍今日のお上の御降誕のお目出度故  
たんとお上り被成せ(工)殿様を擧る詞堂有て今度俄もお  
庭内へお園が出来るといふのト(無苦庵)出服様の武藝も  
のまこりかたなる故少シ和ぐ様とお茶をお勸中夫より園  
の此度の御普請ト(侍)出ハツ奥様も御内談と有て御家老  
のお出もム升るト引返シ這入(無)御出仕と有さむ(工)引  
越て又香直そらト(皆)這入(脇)此由をト與もて(與方)

知らせよ及ぬト出向う從(市原)出(與)シテ内談との(市)  
他聞を憚り升さむ(與)姉共の次へ(秘)畏り升たト這入(市)  
(日)外長の御暇出シ脇坂が柔術の傳書殿御懇望故實子朝  
之承へ余所乍の御物語宮田も夫と察し一巻御覽に入さる  
替りとお園の普請も取掛さむ子細有て其一巻手も入らず  
何卒殿へ日延の義をト無理も頼む詞堂有て(與)殿へ日延  
願ふて見んと這入(伊)出市原氏先刻備前の福山從過急  
の御狀ト(市)思入有て御狀の殿へ御披露致せを貴殿の宮  
田へ彼の一義を(伊)委細承知ト這入(市)狀を見て過急の  
飛札イザ殿へト思入此様宜敷敷道具廻る  
本舞臺都て宮田宅の体爰も(いとせ)(窪平)除掃を仕乍長  
南へ使に遣た忠藏の跡りが遅ヒト案事詞堂有て(窪)前  
町で酒でも肴で居ぬり見て来やうト這入床の淨瑠璃も  
成り(とせ)思入有て與へ這入向う從(忠藏)出香過シた斗  
り御用が足りづ持て歸つた親旦那のお儀の此様ト與從  
(朝之)應(伊)出宮田氏彼一巻を一刻も早く(朝)明日迄よ

の吉左右を(伊)相待中ト這入(朝)アノ忠藏めい如何致シ  
居るかト(忠)を見て(朝)忠藏でないか(忠)へい只今歸  
升てム升(朝)父上從の返書まつた傳書の(忠)サア其一巻  
のト思入有て昨夜粉失致シ升た(朝)エシテ其子細の(一  
忠)其義のト云兼る仕打(とせ)出兄さん御酒の上の不調法  
なら私と咄シかさんせ(忠)只今即答よ(朝)思入有つて  
只今と相成當致致すわへト(侍)走出御家老様が宮田氏も  
過急而談致度と御迎ひにム升る(朝)然らむ御同道を仕る  
ト向うへ這入(とせ)モシ盗ままし傳書の手掛りでも(忠)  
其傳書斗でない大旦那やお種様が殺さしト云詞堂有て  
此事俺も替て旦那跡で咄して呉(とせ)酒故御使ひが送  
言譯がムんせぬの(忠)チヤサ妹俺も替て言譯を(とせ)  
私に云ぬト云放す(忠)夫でい此書置でない書て成り  
とも中譯ト手紙を書(とせ)思入有て私の裏のペリをト這  
入(忠)妹が来ぬ内ト慶期の仕打(とせ)出兄さん様子の殺  
す開升た(忠)聞たと有て此書置ト死ふとする(とせ)旦那

のお歸り迄ト留るを(忠)エ、邪魔な妹(とせ)私か先へ(忠)エ、而倒(な)とせ)を柱へ縛り付鎧を腹へ突立る向う從(朝) (蓮)出ヤコリヤ大變だ(朝)密に致せト戒を解(忠)を介抱する(とせ)自殺の子細ハ此書置(朝)ドレト取上讀む此模様宜敷道具廻る

本舞臺都て茶の間普請の体床の淨瑠璃に成(近習)六次出宮田氏が御普請奉行故出来が早いト云詞臺有て(棟梁)出皆標是、御來被成升たり飛た事が出来升た(近)職人共が喧嘩もで致たり(棟)職人共が御上の噂をト(貞)從(阿)部(無)を引立出(阿)予を不慮流と申た故其分ハ差置ぬ(無)そふを天窓に御めんト下さき(貞)出意見の詞臺有て(阿)奥の諫用ひぬぞト急度成る(朝)出我君暫く拙者が推擧の無苦庵科の拙者(貞)ヌリヤ身引受て(朝)イザ我君御成敗を(阿)チと望と有らぞト思入有て余の者の退座致せト(智)這入(阿)朝之床後陰は参りし密の願ひで有(朝)殿にの夫を(阿)存をるぞよ(朝)シテ何者が我君へ



(阿)不審の尤も傳書の一巻予が懇望致せど脇坂の予を未熟と讀らぬ傳書夫故長の暇遣せしが跡まで聞て謀者の拵事(朝)ハ、御推量の上の今日從御暇を下さり升(阿)其傳書望にない(朝)そりや何故に(阿)敵を討て實父へ孝の立にもせよ返り討成時ハ義父へ義理が相立まいト急度いふ(朝)ムト思入(阿)コリヤ朝之悉だ此上ハ自儘の切腹も相成らぬぞト思入有て這入(朝)仕打有て現在敵の中村求女と知きて乍打事さへも叶ぬりチエト無念の思入(近)六人出求女登期ト打て掛る(朝)六人を相手立廻宜敷有つて與より(市)出何ぞも扣へ召(近)ハツト(智)下手へ這入(阿)伊)出適成る宮田氏の御手練(市)感心の致てゐる(阿)其方の手練を例す上の予が中付る一義有りト墨附を出す(朝)コリヤ復讐の(阿)チサ阿部家への使者(朝)ハツ勉升るでム升(市)殿より旅費の御手當(朝)残る方なき御惠(阿)無事で歸國をト(智)引張の現得此模様宜敷幕

(三幕目)本舞臺都て茨木權現境内の体爰(仕出)今日ハ西の大關瀧見山と才川親分の勘當がゆりて奥州柄出て來雲の戸との取組兩方共に負事な角力殊に初ての顔觸どつちへ團扇が上る見ものだト云乍這入上手從(元山)出鬼の臍に負てけたいが悪いト思入有て嘉藏めが見へぬを腹いせに酒を呑で遣ふト向う從(おむつ)出元山さん内の人わへ(元)今角力場へ往た柄見世番をて居るのよ(むつ)見世番の能が升の隅柄なんで酒を(元)見付らきたり(むつ)呑斗りで勘定をせぬト云詞臺有て(元)俺が勝さへそれ返とよ(むつ)負る方が多ふムんぞ物を(元)イヤ屹度勝と云たいが負る併角力や負ても怪我さへせねバト踊乍這入向う從(雲の戸)弟子)附て出親方けふの大事の相撲でござん(雲)何の恐る事ないが親方の取立で西の關の瀧見山移らふて置ふよト上手從(才川) (明石瀧)出(才)雲の戸チト頼が有る(雲)お頼とハト思入有て野郎共の場所へ行(弟)チイト這入(才)頼と云ハ今日

の取組此間大八と引合せた時兄弟子のこなたは無禮を仕  
たの根が侍イ上り相撲の法も辨へぬ故腹も立ふが今日も  
ろく投ると再び此土地の愚り第一相撲の不繁昌俺も金儲  
をさせると思つて搦梅よくとつて呉(雲)改つた其お頼を  
此間不禮を働くアノ大八其場を取て押へ様とい思ひ升た  
がわしも身性が悪く漸々今度勘當ゆり大關より下され  
た親方さんよめんじて分を取る氣でござんと(兩人)悦ぶ  
詞臺有て(三人)這入(むつ)出雲の戸關の今の詞臺心な物  
じやなト(嘉藏)出おむつ何ぞ用(むつ)お辨當を持て來  
升た(嘉)そう今日の大關の取組だ柄見て行がいく(一  
むつ)見る氣がムんせぬ(嘉)どう言譯で(むつ)其譯ハト  
今の事を咄と詞臺有て(嘉)不斷瀧見山が大言又引替上  
の上が有る物だ(むつ)私ハ内へト這入(嘉)ドレ飯でも喰  
て置ふ小屋へ這入向う從(瀧見山)弟子)附て出(瀧)おむ  
つどんの居ぬト呼(嘉)出關取喚ハ今歸り升た(瀧)そ  
う一杯呑して下せへ(嘉)畏り升た(瀧)酒を呑ヤイ豆

蟹俺の爰も居ると云て來イ(弟)チーイト這入(瀧)嘉藏と  
ん人間の浮沈の知さぬもの俺が上総に居た時分のこなた  
の師匠の甥だ柄俺の主人も同前だが今での酒屋渡世(嘉)  
時代時節で仕方がないが能云う士族の商法とやらで此有  
さまお前の大力が役立力士の中でも西の關(瀧)其西へ  
廻つたのが瀧も障る柄雲の戸を土俵へ埋西と東をふり替  
ねハ腹がいぬ(嘉)夫ハむづかしい(瀧)といなんで(嘉)其  
譯と云のハト女房のいし詞臺有て雲の戸ハ勝まいと  
おしも心配して居る所サト(瀧)腹の立仕打みて嘉藏どん  
雲の戸を呼で下せへト(嘉)呼のハよせト云を(瀧)大言を  
吐詞臺有て是非共爰へ(嘉)夫での呼で來やうト這入(瀧)  
何ぞ工風がト思入(雲)出としに用とハ(瀧)外でもねへ此  
間近付に成つ切逢ねへが今日顔觸が合ッが幸ハ土俵  
の上ハ敵味方其前方に一杯呑んで貰ひてへ(雲)兄弟弟子  
のこなたの盃打解て呑ふうへ(瀧)所で極て置が分や預り  
物云ハ附ねへ氣だ柄振て遣た杯と云ねへ爲の替ハの盃(

雲)そりやア勝も負も時の運(瀧)夫での負ハ跡でふつた  
杯とおぬハ未練を云ねへな(雲)念ハ及むぬ(瀧)其潔  
白の相撲が何ば師匠の頼でも振て遣と大言を吐乍今の詞  
こなたの舌を貳枚遣ふ(雲)いつたらととふ一たト(兩人)  
詞臺渡つて(雲)神佛でも信心して土俵の上へ上るがい  
(瀧)其類げたをト打て掛る(雲)何をト(兩人)一寸立廻り  
(善四郎)出留る詞臺有て(雲)善四郎どのの挨拶故(瀧)意  
根ハ残して爰ハ此儘(善)其異根の残らぬ様ト盃の件有て  
(才)(明石)を(嘉)連て出(才)善四郎殿能留て呉た(明石)  
夫で俺も案心だ(瀧)そんなら雲の戸(雲)瀧見山ト寄を  
皆(瀧)隔る此模様宜敷幕ツナギにて直に引返と  
本舞臺都て相撲場の体(才)(明石)四本柱に住居東西の溜  
に相撲(大勢)扣へ(呼出)名乗をゆげ(行司)立合相撲を取  
事宜敷有て(清吉)西瀧見山東雲の戸と呼出シ(善)東西  
此相撲一番よて今日の打留ト名乗を上(兩人)取組宜敷  
有て(瀧)(雲)の脇腹を握拳よて突(雲)血を吐(善)扱

こそ逆手ト(皆)急度成る(雲)仕打有てイヤ逆手トやな  
い吐血だ(善)でモ今のハ(雲)ハテ吐血にして下されト思  
入(明石)扱ハ師匠の才川へ(才)只何事も義理を立(清)と  
いへみととト云を冠せて(善)アイヤ吐血で有たとへ  
と思入(瀧)年寄衆を初として數方の客の見る前でなんで  
逆手が遣とれよふ(善)コリヤモウいつそト急度ある(才)  
ハテとしよめんじて(清)コレ關取心を儘(雲)清吉ト  
小指を喰切是を國に残せし女房俸へト渡と(清)儘に屈升  
るぞ(瀧)ドレ部屋へ行らう(善)ウツト立掛るを(才)アコ  
レト留る(皆)引張の見得宜敷幕  
(中幕ノ口)本舞臺都て鶴越半覆の体爰(庄や)(百性)大  
勢立掛り居る(庄)此度義經公の云付で平家の奴と見たら  
打殺せハ褒美の金じやト向う從(盛次)出(百)皆(夫)平家  
の侍だ突殺せ(盛)某ハ範頼公從義經公へ忍びの使ト偽る  
詞臺有て百性を欺キ地の理を問う事有て(庄)思入有つて  
源氏の武士ト云乍地理を謀ハ怪敷やつソレ突殺せ(百)合

點だト突て掛る(盛)(庄)皆を相手に立廻り宜敷有ッて  
淺黄幕を冠せ知らせにて幕を切て落ス

本舞臺都て須摩苅藻川の体語掛りの唄淨瑠璃又成(忠度)  
(忠澄)舞臺真中へせり上る(兩人)櫻を詠乍詞臺渡ッて立  
廻り能程に(田五平)出中へ割て入立廻り宜敷有ッてド

(田)を當邊りへ仕打此摸樣宜敷幕  
(同切)本舞臺都て忠澄陣所の体爰に(平山)忠澄に對而ト  
云を(秘)主人忠澄所勞にて引籠り居り升る(平)イヤ是非  
共對面致とト立上る(深谷)出夫ト忠澄所勞故上使の趣妻

の深谷へ仰聞られ升ふ(平)余の義でなぬ忠澄事薩摩の守  
を討取シ恩賞池江口の傾城漣を申受所勞と云立引籠るの  
平家方へ心を寄るとの取沙汰實否を糺よとの上使でふる

(深)思ひも寄らぬか疑ひ軍慮の勞は此程より引籠居るも  
敵の氣變を斗る爲(平)其言譯の吞込ぬ忠澄の薩摩の守よ  
細敷と危き所を旗持の雜兵が加勢に命助り其恩返シ下  
郎を取立親同前に致す由(深)其者の此深谷が實の兄ゆゑ

(皆)奥へ這入此摸樣宜敷道具廻る  
本舞臺都て奥座敷の体獨吟に成(忠澄)(漣)居並び詞臺有  
て(漣)一首を詠(忠)見て行幕て木の下蔭を宿とせバ花や  
今宵の主ならましト思入有て俊成御從頼頼有り一讀人知  
らすと記せし御歌(漣)義經殿の情みて歌人の數は加れバ  
死シての本望ト(漣)出ハツ神崎の遊君長等太夫殿様を見  
ぬ戀はゆがれ押ての奥入にム升るト(忠)仕打有て是へ  
と申せ(漣)畏り升たト這入(漣)愴氣の詞臺有りて(忠)高  
樓で待て居や(漣)アイひつさん後又ト這入下手從(長)(  
漣)附出(忠)長等とやら是へ來やれト酒を呑件有ッて(漣)  
共ハ季重殿を饗應申せ(漣)ハツト這入(忠)コレ太夫身が  
側へ寄やれ此手の尋常サ是も其人の管と思ふにぞ(長)猶  
なつクーさ袖の移り香と云古歌の心を御存うへ(忠)知ら  
いで成らふか(長)其やさしい心で源平の戦ひに高名手  
柄を被成たとの(忠)チ其が手柄と云ハ千歳集に撰だれ  
漣や志賀の都ハ荒よ一を昔長等の(長)エト思入(忠)山

養ひ置升るが今日の生田の社へ參詣の留守よム升る(平)  
師を待て實否を糺さんト(漣)付添(皆)奥へ這入(茂次  
兵衛)出(軍卒)留乍コト斷りなく何で廣間へ通るのだ(茂  
一)俺が世話でよこした田五平が出世を志た故達て褒美を  
賞ふのだト向う從(田五平)(長等)(仲居)出詞臺有て(深)

賞ふの同道なせし見訓ぬ女中(田)神崎の廓にて漣と肩  
を並べる長等太夫が押りけの興人(長)申奥さん必ズ叱ッ  
て下さんすな(田)ハテ遠慮のない此樂人齋がそちが望の  
叶へて遣す(茂)思入有てコレ田五平ゑらい出世をいたな

(田)そちハ人足廻シの茂次兵衛(茂)チ一ト理屈云よ  
來たのよ(田)是迄世話に成つた禮ハ澤山致すぞよ(茂)夫  
ハ有難い(田)妹身が留守中何ぞ用でも(深)梶原様の御  
使者逆平山さまが夫トの病氣見届に(田)忠澄は對面一た

り(深)イエ漣太夫と只貳人形の高樓よ(長)スリヤむつさ  
んの漣さんとト思入(田)ハテ初對面柄愴氣ハ野暮奥へ往  
て待て居やれ身共ハ平山に對面せん皆も來やれト此人數

櫻のな讀人知らずと書たる附文建シ屏風も須摩の浦思ふ  
お敵と組討よ右の腕を切落シ(長)エ(忠)思ふお敵を討取  
た(長)アノ忠慶様を(忠)何よも(長)ハアト泣伏(忠)  
まだ面白イ咄モ有れば其時とつくり菊の前(長)エ(忠)  
イヤサ兎角大事の國の内(長)互ひに名乗て夫マの仇ト様  
下に(茂)伺う(忠)仕打アイヤ仇花ならぬ櫻木の花ハハ風  
のト邊りへ仕打此摸樣宜敷道具廻る  
本舞臺都て居間の体爰よ(平)(茂)立掛り合點の行ぬ忠澄  
が振舞此由を梶原殿へ(平)某ハ漣が素性を糺シ申さんト  
(兩人)上下へ這入床の淨瑠璃に成上下從(深)(長)出忠澄  
が最前の詞どふやら心有り氣な様子(深)夫トを討と兄上  
の難題まだ其上に漣と云長等とやら合點の行ぬ夫トの心  
底ト互ひに行當(長)ヤお前の奥さん(深)忠澄殿又逢一や  
ん一たか(長)アイ其忠澄ハ夫マの仇(深)エト思入(長)サ  
ア夫マの固をする約束(深)女房の私シが成らぬといのト  
一寸(兩人)立廻り(田)出留る詞臺有て長等の身共が合圖

をト間(長)必詞の違ぬ様ト遣入(深)戀の敵のアノ  
女ト行を引留(田)アリヤ忠度が妻菊の前(深)何故夫トと  
祝言と(田)コレ妹はれも共忠澄を討ト云詞臺有ツて  
(深)思入いかにも夫トを討升ムト云乍(田)へ切て掛る一  
寸立廻り(忠澄)出支へる(田)忠澄が病氣と云し(偽り)よ  
な(忠)今日只今全快致一た(田)夫の重疊此上へ改て連に  
暇をやれ(忠)遣ぬト云(田)親同前の舅の詞を背く憎イ奴  
打て掛るを支へる(田)鏡櫃より陣笠出る(忠)此二タ  
品覺へが有ふ(田)なんとト思入(忠)アノ愛な匹夫めが女  
房深谷が兄なれば舅の親と尊敬すれば警がたなき人畜め  
がト鎖めて打居る(田)仕打有て忠澄の思知らずめが高名  
手柄の誰が影だ此鼻がさせたのだと梶原殿へ注進するト  
行を(深)兄なれ共モウ此上へト切て掛るを支へる後より  
(長)出(田)を切(長)夫マの敵の忠澄と思ひの外賊の此曲  
者(深)夫トの恨(長)我夫マの仇ト又切付る刀を我手に腹  
へ突込(忠)思入有て伊賀の平内左衛門が俵田五平最期の

際にさんげせよ(田)驚き入たる御明察某が母の菊の前様  
御乳を上シ者妹そちの乳兄弟我父の苗字を願さんと心  
を碎く須摩の戰場母は縁有る忠度卿を助んと欠付しが暫  
シの氣絶に息吹返シ見れば六彌太の忠度卿を討たる跡夫  
従味方と見せて此家へ入込思ひ掛なく妹に逢ひ夫ト忠澄  
討取よと云付ても所詮討まい夫よりハ姫君を討れんと死  
ぬる覺悟の手柄咄忠度卿の敵ハ某又平家方の兄を切たハ  
妹が貞心(忠)殊氣の最期忠度卿ハ此世も永らへおわさる  
ぞ(田)ナニ忠度卿が(兩人)おわさると(忠)連こそ忠度  
卿今日迄包隠せ一期の大事語聞さんト物語の詞臺有て  
汝が心底心得ずと思ふは違わす頭巾の裏に記たる此戒名  
夫故養ひ置たる情の獄屋(田)忠度卿を御助命ハ(兩人)義  
經公の御情なる(田)秘)出奥入る連様の忠度様と平山  
殿が大勢にて圍む様子ト云捨入(忠)扱ハ大事に及びし  
り(田)聞捨難キ大事行行行れぬ此深手(忠)氣遣ハ致な  
某能に斗わん(田)夫もて思ひ置事ナト落入(皆)是が

此世のト愁ひの仕打此換様宜敷幕ツナギよて引返ス  
本舞臺都て奥座敷庭先の体床の淨瑠璃も成(連)仕打有て  
合點の行ぬ數多の小蝶殊は紅白争ふの今源平の戦ひを目  
前知らせの占なる(田)向(平)軍兵大勢連出(平)女  
姿にやつせ共誠の忠度サア尋常又細又掛れ(連)ヤア汝等  
如も生捕る忠度ならずト急度成る(平)者共ソレト(皆)  
(長)出ヤあまたの我夫マ(連)菊の前の(深)如何も御怪我  
ハト(連)仕打有て扱ハ季重大軍を以て押寄ると覺たりト  
向うにて(忠)岡部の六彌太忠度卿へ見参ト聲を掛(軍兵)  
大勢乗馬を曳出(連)忠度殿の此体ハ(忠)八鳥の浦へ出陣  
の門出(連)此忠度ハ門出の血祭(忠)アイヤ忠度卿ハ某が  
討取つたれば義經公の情を無にせず菩提を問うが女姿の  
則チ役目イサ乗馬(連)實に尤ト馬に乗思入有て諸人知  
らずと給り上げ五文字の連や(長)昔長等を暫の呼名(深)  
散を散さぬ山櫻ト(軍)掛るを投返シ(忠)旁々勝鬨ト

皆)引張の見得宜敷段切にて幕  
(四幕目)本舞臺都て雲の戸内の体爰(西念)餅を咽へつ  
うへ苦むを(百性)三人介抱とる(お縫)水天宮のお札を  
持出弄せる(西)お影て下り升た時又今日の佛の勘五郎殿  
の悴雲の戸殿の善太夫殿の娘御此お縫殿と夫婦又成十次  
郎と云子迄出来たが酒の上で親方の勘當受故郷へ引込で  
居たが今度詫が叶ひお縫の弟善四郎殿と常陸へ相撲で  
行たが手柄して歸るで有(百)十次郎殿ハ(縫)ハイと  
さんの所へ(百)聞ハ善四郎殿の娘ハ十次郎殿に夏の牡丹  
餅(百)従弟同士の何とやらだ(皆)アハトト笑ひ乍這  
入向う從(十次郎)(お蝶)出詞臺有て(十)只今戻り升た  
(縫)大急遅くつたの(十)伯父さんが戻って居り升た故縫  
ナニ善四郎が(十)仕打有て云ふのでいなつたよ(縫)口  
留とるとハト思入誰やら表に(十)ハイお蝶さんが私を送  
つて(縫)他人がまじい遠慮ない(蝶)伯母さん此間ハ(縫  
(思入有て雲の戸殿が戻つたらお蝶を嫁貰うト云詞臺

有て(兩人)與へ這人(縫)弟が歸り乍便りをせぬハト思入  
床の淨瑠璃に成向う從(善太夫)出娘内又居たか(縫)ヤと  
さん何で坊さんに(善)サア坊主に成たハト思入有て外  
の事に紛らす詞臺有て(縫)其包わへ(善)是ハ眞桑瓜ヒヤ  
が今日の佛へ備て置ふ(縫)燒場柄持ッて歸つた様な包モ  
シヤ夫トの身の上(善)其雲の戸ハ手柄をしたト云詞臺  
有て(十)(蝶)出(十)爺さまハ何で坊主に(蝶)譯を聞せ  
て下さり升せ(善)別譯もないが髪毛のない方がうる  
さくない柄(縫)思入有てモシとさん私も力士の女房未  
練な心ハムんせぬナセ打明て聞せてハ下さんせぬ(善)娘  
出加した能云ツた實ハ雲の戸ハ死だハやい(三人)エトト  
恠り(縫)氣絶とる(皆)介抱して漸ハ心付(縫)さういふ  
譯で(善)其子細と云ハト相撲場の事柄を語る詞臺有ッて  
善四郎ハ姉の歎を思ひ遣俺に此骨を持って往て呉との頼ミ  
道で寺へ寄髪をゑろハた此坊主親の忌日ハ戒名を付た其  
日を命日と思入て回向をして遣りや(縫)コレこちらの人

逆手で負て何んで相手を其儘に(十)尋常の手で投殺され  
仕方もないが(蝶)とさんが行司をしたと聞柄ハナセ逆  
手じやと云張て敵をお取被成せぬぞト(才川)(清吉)伺ハ  
居て(才)其譯ハとしが咄升ラ(善)思ハ掛あさ才川親分(才)  
皆さんが定て歎くでムらふと(清雲)戸關のお籠を屈  
ム参り升た(才)其譯と云ハ去年弟子入した素人相撲の瀧  
見山何所の場所でも出来がよく常陸の場所西の關東の  
關よとる者なく江戸柄呼べハ金高と雲の戸を呼寄て東西  
ハ分興行とせハ皆としの弟子同士一番お釜を起そうと思  
ひ立たが我誤り(清)兩大關の立合も段の違ッた雲の戸關  
分よとる氣を向うでハぶち込積で由斷を見濟シ比興も  
逆手の早業(才)善四郎殿が逆手と聲を掛たれと雲の戸ハ  
吐血と云張其場を無事に濟したハ此才川が儲を空敷せぬ  
師匠思ハ(清)其時渡した此小指(才)師匠ハ義理を立通そ  
雲の戸此才川を敵と思つて此首取て手向て下せハ(十)ス  
リヤ此小指が親父様のト思入有て吞ミ氣絶とる(皆)介

抱とる(十)心付急度成りかのを怨敵瀧見山(善)思入有て  
才川親方ハ恨ハない(縫)只恨しいハ瀧見山(十)此十次郎  
を御弟子とせし敵を討せて呉ト云詞臺有て(才)骨細故力  
士ハ成難ト思入有て師匠のとし故討ぬと有ッバ此金  
子ハ則首代(縫)此ハ金の受らる升ぬ(才)雲の戸への吊ハ  
料(清)今夜ハ回向を(才)逆縁乍師匠の役(善)お客來故お  
蝶ハ内へ(蝶)私ハ爰又(善)ハテ歸るといふムト與と向ラ  
へ這入(縫)モハこちらの人淺間敷身ハ成らえやんしたナ  
ト歎く詞臺有て夫トの仇討いで置ふト急度成(才)(清)  
上手ハ伺ラ下手ハ(十)伺ラ(縫)表ハ誰やら(十)母者人ハ  
さらバト走り行此様機宜敷道具廻る  
本舞臺都て松原の休爰又(善介)三人酒を吞乍(雲)昔と違  
ッて追々往來が淋敷なつたト向ラ從(十)出(雲)口ハムト  
やと云故(十)私ハ欠落者でハム升ぬ(雲)見ハ若衆だ  
がとんと女の様な丸裸とる從爰で思入て遣ラト追廻シ  
手込ませんととる(朝之丞)出(雲)を投退(朝)亂法致とと

切捨るぞト(雲)逆て這入(十)お侍様難義寺所を有難ふム  
升る(朝)見と前髪的身よて夜陰ハ歩行ハ子細を有らん  
(十)ハ私ハ奥州白石在の百性で相撲取の悴で親雲の戸  
が瀧見山と申者ハ殺ささし筋の詞臺有て私ハ非力故敵ハ  
討ぬと云と升た悔シさハ内を抜出修行して敵を討ん志シ  
(朝)思入有て頼母敷其心底某連も同シ事矢張敵を尋ねる  
者(十)ハテ似た事もム升るナ(朝)元某ハ阿部家の藩父ハ  
脇坂次郎右衛門迎柔術の指南たりしが浪人なし其舎弟寅  
内何某ハ阿部家ハ仕官致居る故某養家を繼しハ昨年甥の  
中村求女我養父妹共討きたる仇を討んと尋ぬる敵の有  
所ハ秋田と聞通り掛りし此松原孝子を救ふも天の導引ト  
思入有て僅な共旅中の手當ト金を遣る(十)何柄何まで  
有難ふム升る(朝)未ダ夜明ハ問も有れハ焚火ハ當て参る  
がよい(十)デモ今の雲介ハ(朝)身共居るを大丈夫ト當  
り乍幸ハ是ハ酒が有る夜露を拂ハ是幸ハト吞乍互ハ  
述懐の詞臺有て(朝)某も力と頼む兄弟連も有らざれば御



身が孝子の心よめで義兄の契約致したい(十)願ふてもな  
い其御詞(朝)然らば此場でト因を結ぶ件有て見受シ所非  
力故武士と相成敵を討滅のないう(十)御尤も候得ども  
土俵の上で敵が討たふり升る(朝)然らば當身を除る死  
活の極意を教遣さんト柔術と相撲の立廻り有て(清)出十  
次郎殿(十)やこあた(清)おまへが内に見へぬ故跡を  
追欠て來升た(十)敵を討て歸る迄母者人又待て居て下さ  
まと云て下さ(朝)扱ひ身寄りの者(清)ハイ雲の戸開  
よお世話も成た呼出シ奴でム升る(朝)然らば關取衆も近  
付ならん十次郎が師匠と頼力士の誰成るぞ(清)先綾川關  
でム升ふ(朝)其方取持より弟子入させて呉まい(清)  
何でゆたが(朝)實の只今十次郎と義兄弟の契約致たト  
云詞臺有て(清)何も私が同道致そうが一旦内へ(十)歸  
ッたら江戸へ遣て下さるまい(朝)身共の今從陸奥へ參  
る故内で案堵致し様傳言を致して遣そふト所書を記ス(一  
清)相撲の番附を出(三人)詞臺渡ッて(朝)最早鶴鳴(十)左

様成さば兄者人(朝)弟(清)御武家さま(十)重ねて江戸で  
ト顔を見合せ仕打此様宜敷幕  
(五幕目)本舞臺都て茶屋千歳樓の体爰(鳴岩)踊て居る  
(女中)四人モシ鳴岩さんねだが抜升といナ(鳴)ナニ構ふ  
事のねへト留るを請乍追廻シて這入(女)客の善惡を云詞  
臺有て(才助)出むだ口を利ツと奥へ行(女)アイとト官  
入向う從(清)出桂川さん見へ升ぬ(才)瀧見山の御連  
中斗りサ(清)何所へ往たり爰の内待方が大丈夫だ(才)  
丁度一杯初る所(清)御馳走も成り乍待升うト這入(嘉)  
出爰のね内は瀧見山と云關取のト奥從(瀧見山)出俺を尋  
て來たハト顔見合せ(嘉)金儲との手紙故急いで來たが(一  
瀧)外でもねへ兼て貳人を敵と規朝之蒸に出ツく且し漸  
口車で云拔俺が下宿へ留て置が今宵小松原で返り討ト  
云詞臺有て(嘉)這入(瀧)仕打有て爰迄の味く欺して釣寄  
たがト奥從(朝)小春(出)朝)コレ大八此間よりの厚キ世  
話頼て本切遂なバ恩を謝そで有ふ(瀧)大恩の有る師匠の

御子息只憎くいりあの求女伯父と云妹御送討て立退人非  
人心當もム升れば頼て御本望を遂させ升る(小)コリヤか  
咄がまじめに成た(瀧)奥座敷で今一献(小)サアムんせい  
なト(皆)這入(桂)出思入有て義理有る兄と大八が居る  
との事とふの仕よふがト(小)菊 出桂川さん能所へト口説  
詞臺有ッて(鳴)出俺の揚詰の小菊を横番切た桂川關取の  
前へ連て行柄其文をト取り掛る(才)出留て文の間違ひの  
件有て(朝)出仲人又這入詞臺有て(才)(鳴)(小)這入(桂)  
兄者人(朝)コレト思入有て某様子を探り見る又敵の大八  
求女の兩人と并置致せば一人の其方又讓心慮(桂)只此上  
の瀧見山と手合せを(朝)心こやるハ尤なと綾川殿より  
源氏山が頼れし義も有れば時節待れよ(桂)モシ敵が病死  
あさを誰と敵と討升ふ(朝)左程も思ひ詰し上手合せ  
させんが必不短氣を(桂)慎升きを能吉左右を(朝)待て居  
やとト(桂)這入(小)出宮田さんお樂でムんそ(朝)扱ひ  
今の事を(小)アイ(朝)ムト思入(小)お前の氣強イ御心

トやなト色合の詞臺有て(小)見捨ぬといふ證據を(朝)そ  
りや金打成と神文なりと(小)夫よりのまつぱりと(朝)瀧  
るを證據といやるの(小)案心させて宜敷道具廻る  
本舞臺都て座敷の体爰(瀧)(鳴)(藝者)(女中)(才)酒を  
肴乍最前の文の争ひ詞臺有て(瀧)あまの立立故鳴岩の勘  
定も一ツ所又拂升(才)夫の有難ふム升ト這入ト奥よて  
(朝)早く參れと申(桂)を引摺出(藝)桂川さんを何故  
手込(朝)瀧見山の事を悪くいふた柄引立參つた酒の肴  
又庭の砂へ埋てくれ(鳴)俺がきのふの意趣返シ(瀧)鳴  
岩までト思入有て源氏關の供をして來た桂川とやら俺が  
一ツ捨る日よの五昧のちんも成るぞよ(桂)無念の仕打  
(瀧)何だ腹を立とい身の程知らぬ案丁稚めがト立掛る(一  
藝)留る詞臺有て(朝)桂川とやら投殺されても言分ない  
り(桂)何の言分ム升ふ(朝)瀧見山柔術の手ハ力士の取(一  
瀧)ナニこいつらよ(朝)身共が行司を致そラト(兩人)角力  
の立廻り有て(桂)投られ又起上るを(朝)勝負見へ

たぞ(龍)まだ揉で背ひてへの(桂)チエミ口惜イ(龍)俺  
 負て有難との思ひづは悔敷杯との馬鹿な小僧だ産を替  
 ッて相撲ななき其時の又揉で遣の併末期の水替り此盃を  
 與て遣ハト盃を打附る(桂)コリヤ力士のシヤッ面へ(龍)  
 力士の數も入ものウ(桂)コリヤモウいつそト立掛る(朝)  
 無禮者めがト思入(龍)(女)(桂)を介抱せる(龍)若旦那是  
 うら下宿で(朝)肴直そらのト(皆)這入(桂)行掛るを(桂)  
 清(出)マアお待被成升セ(桂)エミ口惜ムる(清)是だ柄い  
 ねへ事トヤアねへト意見の詞臺有て(桂)負たの我慢を  
 るが類へ疵を付られてハト行を留件有て(源氏山)出無法  
 者めが(桂)源氏關の(源)コレ綾川關の詞を背キ亂法働  
 き俺の顔迄汚ス氣ウ(桂)其か腹立ハ去事乍御恩を無よし  
 た上ららハ瀧見山と差違ひて(源)コリヤ今恥辱を受る共  
 後日ハ土俵で意根を晴せト(朝)出能ぞ留て下された(源)  
 宮田様ハ此場の事を(朝)サア義は依て兄弟と成桂川座  
 興ハ事寄勝負をさせしハ身共が斗らハ不覺を取て綾川殿

や貴殿の丹精無よせし弟某ハお預け下さらハ柔術の極意  
 を以て敵を討せん此義ハ聞濟下さるや(源)左程迄ハ思召  
 ハ恭のふム共綾川より預りし桂川即答ハ御挨拶ハト  
 小)出宮田さん最前ハ斯う云わけと知らぬ故(源)扱ハ大事  
 を(桂)聞きしか(朝)アイヤ彼ハ某ハ權妻同前(桂)トハ云  
 大事を抱シ御身(朝)夫も密事を漏さぬ誓ひ(源)左様成  
 心(三人)宮田様(小)トハハ是が(朝)ハテ又の時節をト  
 仕打此模様宜敷道具廻る  
 本舞臺都て小松塚の体爰ハ(龍)立掛り居て(龍)道迄  
 朝之蒸と來たが忘レ物をしたハ途中柄師ハ故鳴岩を見せ  
 ハ遣升た(嘉)風をくらッて逃やしねハ(龍)そんな比卑  
 人ハでないト仕打有てアレハ向ラハ(嘉)ドレト(龍)  
 (嘉)ハ繩を掛るコレ大八とふぞるのだ(龍)朝之蒸ハ敵を  
 討せるのよ(嘉)エミ(龍)悪い事ハ出來ねハの師匠の内ハ  
 居た時分柔術の傳書を盗ハ遣人ハ寢所の内娘の寝顔を見  
 るハ付かのとハ抱寝をさせるがむやくしくをらして立退



折師匠ハ見答らミ逃出ハ庭ハ松ケ枝を飛越すとたんハ突  
 出ハ鎧で伯父を殺した求女故互ハ罪を明し合今日まで  
 突合たも爰で手めへを討せて置俺が身拔をぞる爲だ(嘉)  
 人違ハト云乍伯父を殺た科わきと汝も無事で置べきや  
 (龍)其類げたの動ぬ様ト猿轡を掛る向ラ從(朝)鳴(出)龍  
 一モシ若旦那求女を捕て置升た是で荷擔をせねと云疑念  
 を晴して下さい(朝)チハ求女か能ハ無事であつたか(鳴)  
 宮田様早くやつ付てお仕舞被成(朝)イヤ縛首を討ハ武士  
 の本意ハわらす尋常の勝負なさんト繩を解件有て(嘉)宮  
 田氏從弟同士のよしみを思ひ能ハ繩目を解さし伯父上  
 を殺せしハ曲者を仕留んと過ッて(龍)エミ俺ハ科を塗付  
 んト互ハ争ふ詞臺有て(朝)マア論ハ無益敵を名乗りて  
 勝負せよ(嘉)何よも伯父を殺害なせしハ此求女妹御を殺  
 一卷奪取しハわの大八(龍)血送て何のたわ言サア若旦那  
 (朝)思入有てマア此通りト提灯を切落ス問の仕打探り合  
 の立廻り宜敷有てドハ(嘉)ハ花道へ行(朝)向ラハ思入

龍(鳴)を引付ける此模様宜敷幕

(六幕目)本舞臺都て綾川内の体爰(曲金)(下女)(灸賢)立掛り居て岡山より源氏關や桂川さんが歸つて來たので急(關)云詞臺有て這人向う從(善太夫)(お蝶)出(善)こちらのお内(奥州白石在柄來たお弟子)居り升ぬ(下)出ハイ夫(お蝶)を見てイエ此内(お蝶)居づ又綾川關も留守ト僞る(兩人)是非なく這入(下)私の戀を叶へずよ今の娘と約束したま違ひない其意趣返シを仕て遣たト這入向う從(お蝶)跡より(善)(蝶)付て出(善)儘(お蝶)あきたの綾川關の(絹)ハイ女房でムんと(善)私(お蝶)の行司の善太夫でム升ト(絹)仕打有て本(お蝶)姿が變た故お見忘れ申升た(善)此度孫を連參り升たがお宅(お蝶)十次郎と申者が(絹)ハイ三年跡弟子入して今の名(お蝶)桂川力藏と申て居り升(蝶)夫關て落付升た(絹)マア内へ這入てゆるゆるお咄を聞升ら(下)出(お蝶)おみさんお歸り被成升せ(善)留守だと云た(下)思ひ違ひを仕升たのサ(蝶)意地の悪イ(下)エ(善)そこッ

うしい女中たきト此模様宜敷道具廻る

本舞臺都て客座敷の体爰(綾川)(源氏山)(朝之丞)(清吉)旅飾りの祝ひ酒を呑件有て(源)改て綾川關へ詫と云(お蝶)桂川が瀧見山と手合せして疵迄付られたが(清)土俵と違ひ座興の事(朝)此兄が留守が落度ト詫る詞臺有て(綾)源氏關われ程頼んだ力藏を手込よさせる位なら今度の場所への遣ぬ物ト思入(朝)此度の不始末(お蝶)某が落度なれと綾川殿が見放すとわれ(お蝶)某引取柔術の極意を免シ敵を討せんと其砌申せしが綾川殿の挨拶次第とお貳人の詞(お蝶)任せ態(お蝶)當地へ同道致せを否哉の返答(お蝶)聞せ下され(綾)返(お蝶)武家恭ひ其お詞なれと柔や力(お蝶)敵を討せる位なら是迄苦勞の致升ぬ(朝)シテ本望遠る目的(お蝶)今從二ケ年相立ね(朝)夫(お蝶)不都合千方ト(三人)そりや何故(朝)某が敵と呪うも瀧見山(お蝶)求女(お蝶)過ち(お蝶)伯父を討せ妹の敵(お蝶)大八故求女(お蝶)見の(お蝶)置シ(お蝶)弟(お蝶)土俵で投させ上討せ(お蝶)我心底(お蝶)綾(お蝶)思入(お蝶)有(お蝶)千(お蝶)令(お蝶)鷹(お蝶)切(お蝶)放(お蝶)さ(お蝶)ね

心の警(お蝶)基(お蝶)今度の落度を科(お蝶)として勘當(お蝶)かし彼(お蝶)鷹(お蝶)を付(お蝶)る(お蝶)が奸(お蝶)要(お蝶)皆(お蝶)コ(お蝶)リ(お蝶)ヤ(お蝶)能(お蝶)策(お蝶)で(お蝶)ム(お蝶)る(お蝶)ト(お蝶)桂(お蝶)出(お蝶)親(お蝶)方(お蝶)御(お蝶)機(お蝶)嫌(お蝶)宜(お蝶)敷(お蝶)う(お蝶)綾(お蝶)桂(お蝶)川(お蝶)跡(お蝶)ッ(お蝶)たり(お蝶)ト(お蝶)思(お蝶)入(お蝶)有(お蝶)て(お蝶)額(お蝶)の(お蝶)疵(お蝶)ハ(お蝶)桂(お蝶)ハ(お蝶)イ(お蝶)是(お蝶)ハ(お蝶)源(お蝶)瀧(お蝶)見(お蝶)山(お蝶)に(お蝶)投(お蝶)ら(お蝶)と(お蝶)剩(お蝶)へ(お蝶)疵(お蝶)迄(お蝶)付(お蝶)ら(お蝶)を(お蝶)升(お蝶)た(お蝶)綾(お蝶)俺(お蝶)で(お蝶)さ(お蝶)へ折(お蝶)鑑(お蝶)乏(お蝶)た(お蝶)事(お蝶)が(お蝶)ない(お蝶)よ(お蝶)何(お蝶)ん(お蝶)で(お蝶)疵(お蝶)を(お蝶)桂(お蝶)サ(お蝶)ア(お蝶)其(お蝶)子(お蝶)細(お蝶)ハ(お蝶)ト(お蝶)千(お蝶)歳(お蝶)櫻(お蝶)の(お蝶)相(お蝶)撲(お蝶)の(お蝶)筋(お蝶)詞(お蝶)臺(お蝶)有(お蝶)て(お蝶)モ(お蝶)ウ(お蝶)少(お蝶)し(お蝶)で(お蝶)勝(お蝶)所(お蝶)を(お蝶)綾(お蝶)コ(お蝶)レ(お蝶)師(お蝶)匠(お蝶)を(お蝶)目(お蝶)くら(お蝶)に(お蝶)す(お蝶)る(お蝶)瀧(お蝶)見(お蝶)山(お蝶)と(お蝶)そ(お蝶)ち(お蝶)ト(お蝶)泥(お蝶)龜(お蝶)と(お蝶)月(お蝶)程(お蝶)違(お蝶)ふ(お蝶)故(お蝶)是(お蝶)迄(お蝶)立(お蝶)合(お蝶)せ(お蝶)ぬ(お蝶)の(お蝶)ト(お蝶)や(お蝶)わ(お蝶)が(お蝶)詞(お蝶)を(お蝶)用(お蝶)ひ(お蝶)ぬ(お蝶)者(お蝶)ハ(お蝶)今(お蝶)日(お蝶)より(お蝶)師(お蝶)弟(お蝶)の(お蝶)縁(お蝶)ハ(お蝶)切(お蝶)た(お蝶)ぞ(お蝶)よ(お蝶)ト(お蝶)急(お蝶)度(お蝶)云(お蝶)桂(お蝶)モ(お蝶)シ(お蝶)源(お蝶)氏(お蝶)關(お蝶)ハ(お蝶)詫(お蝶)言(お蝶)を(お蝶)ト(お蝶)聞(お蝶)ぬ(お蝶)故(お蝶)朝(お蝶)ハ(お蝶)頼(お蝶)む(お蝶)コ(お蝶)レ(お蝶)弟(お蝶)師(お蝶)匠(お蝶)で(お蝶)さ(お蝶)へ(お蝶)見(お蝶)限(お蝶)汝(お蝶)義(お蝶)兄(お蝶)の(お蝶)縁(お蝶)も(お蝶)是(お蝶)限(お蝶)り(お蝶)桂(お蝶)エ(お蝶)ト(お蝶)奥(お蝶)ま(お蝶)て(お蝶)絹(お蝶)其(お蝶)お(お蝶)詫(お蝶)ハ(お蝶)私(お蝶)が(お蝶)ト(お蝶)善(お蝶)蝶(お蝶)を(お蝶)伴(お蝶)ひ(お蝶)出(お蝶)綾(お蝶)お(お蝶)行(お蝶)司(お蝶)の(お蝶)源(お蝶)善(お蝶)太(お蝶)夫(お蝶)殿(お蝶)朝(お蝶)ど(お蝶)ふ(お蝶)して(お蝶)爰(お蝶)へ(お蝶)絹(お蝶)残(お蝶)ら(お蝶)ず(お蝶)様(お蝶)子(お蝶)ハ(お蝶)聞(お蝶)升(お蝶)た(お蝶)が(お蝶)善(お蝶)太(お蝶)夫(お蝶)殿(お蝶)や(お蝶)孫(お蝶)の(お蝶)お(お蝶)蝶(お蝶)殿(お蝶)の(お蝶)頼(お蝶)ハ(お蝶)此(お蝶)場(お蝶)の(お蝶)お(お蝶)詫(お蝶)綾(お蝶)イヤ(お蝶)詫(お蝶)言(お蝶)ハ(お蝶)聞(お蝶)ぬ(お蝶)ぞ(お蝶)よ(お蝶)ト(お蝶)善(お蝶)蝶(お蝶)を(お蝶)悪(お蝶)く(お蝶)云(お蝶)詞(お蝶)臺(お蝶)有(お蝶)て(お蝶)善(お蝶)不(お蝶)沙(お蝶)汰(お蝶)を(お蝶)詫(お蝶)る(お蝶)件(お蝶)有(お蝶)て(お蝶)蝶(お蝶)兄(お蝶)の(お蝶)善(お蝶)四(お蝶)郎(お蝶)病(お蝶)死(お蝶)旁(お蝶)々(お蝶)何(お蝶)や(お蝶)り(お蝶)や(お蝶)ま(お蝶)て(お蝶)十(お蝶)次(お蝶)郎(お蝶)さん(お蝶)の(お蝶)三(お蝶)年(お蝶)越(お蝶)の(お蝶)お(お蝶)世(お蝶)話(お蝶)の(お蝶)お(お蝶)禮(お蝶)も(お蝶)疎(お蝶)遠(お蝶)の(お蝶)段(お蝶)ハ(お蝶)御(お蝶)免(お蝶)シ

被成て下(お蝶)り(お蝶)升(お蝶)せ(お蝶)桂(お蝶)爺(お蝶)さま(お蝶)お(お蝶)目(お蝶)に(お蝶)掛(お蝶)る(お蝶)も(お蝶)而(お蝶)目(お蝶)か(お蝶)い(お蝶)此(お蝶)始(お蝶)末(お蝶)善(お蝶)親(お蝶)ハ(お蝶)不(お蝶)孝(お蝶)や(お蝶)つ(お蝶)綾(お蝶)川(お蝶)關(お蝶)が(お蝶)見(お蝶)限(お蝶)柄(お蝶)ハ(お蝶)爺(お蝶)も(お蝶)今(お蝶)柄(お蝶)勘(お蝶)當(お蝶)じ(お蝶)や(お蝶)絹(お蝶)其(お蝶)お(お蝶)腹(お蝶)立(お蝶)ハ(お蝶)尤(お蝶)も(お蝶)乍(お蝶)力(お蝶)士(お蝶)の(お蝶)數(お蝶)も(お蝶)入(お蝶)た(お蝶)力(お蝶)藏(お蝶)共(お蝶)ハ(お蝶)詫(お蝶)の(お蝶)被(お蝶)成(お蝶)ら(お蝶)い(お蝶)で(お蝶)蝶(お蝶)十(お蝶)次(お蝶)郎(お蝶)さん(お蝶)に(お蝶)モ(お蝶)シ(お蝶)も(お蝶)の(お蝶)事(お蝶)で(お蝶)も(お蝶)有(お蝶)る(お蝶)時(お蝶)ハ(お蝶)私(お蝶)も(お蝶)生(お蝶)て(お蝶)居(お蝶)り(お蝶)升(お蝶)ぬ(お蝶)善(お蝶)コ(お蝶)レ(お蝶)娘(お蝶)そ(お蝶)ん(お蝶)お(お蝶)奴(お蝶)ハ(お蝶)構(お蝶)わ(お蝶)ぬ(お蝶)が(お蝶)能(お蝶)ト(お蝶)綾(お蝶)早(お蝶)く(お蝶)此(お蝶)家(お蝶)を(お蝶)出(お蝶)て(お蝶)失(お蝶)う(お蝶)ト(お蝶)急(お蝶)度(お蝶)云(お蝶)桂(お蝶)親(お蝶)方(お蝶)様(お蝶)此(お蝶)世(お蝶)で(お蝶)御(お蝶)恩(お蝶)送(お蝶)り(お蝶)ハ(お蝶)出(お蝶)來(お蝶)ぬ(お蝶)變(お蝶)り(お蝶)産(お蝶)變(お蝶)ッ(お蝶)て(お蝶)致(お蝶)シ(お蝶)升(お蝶)る(お蝶)ト(お蝶)皆(お蝶)ハ(お蝶)禮(お蝶)と(お蝶)暇(お蝶)乞(お蝶)の(お蝶)詞(お蝶)臺(お蝶)有(お蝶)て(お蝶)此(お蝶)世(お蝶)で(お蝶)お(お蝶)目(お蝶)ハ(お蝶)掛(お蝶)り(お蝶)升(お蝶)ぬ(お蝶)ト(お蝶)愁(お蝶)ひ(お蝶)の(お蝶)仕(お蝶)打(お蝶)有(お蝶)て(お蝶)這(お蝶)入(お蝶)絹(お蝶)蝶(お蝶)泣(お蝶)伏(お蝶)三(お蝶)人(お蝶)顔(お蝶)見(お蝶)合(お蝶)思(お蝶)入(お蝶)善(お蝶)皆(お蝶)さん(お蝶)是(お蝶)に(お蝶)ト(お蝶)行(お蝶)を(お蝶)綾(お蝶)善(お蝶)太(お蝶)夫(お蝶)殿(お蝶)今(お蝶)の(お蝶)三(お蝶)人(お蝶)云(お蝶)合(お蝶)の(お蝶)勘(お蝶)當(お蝶)さ(お蝶)心(お蝶)源(お蝶)途(お蝶)中(お蝶)を(お蝶)案(お蝶)事(お蝶)る(お蝶)事(お蝶)ハ(お蝶)ない(お蝶)朝(お蝶)一(お蝶)日(お蝶)も(お蝶)早(お蝶)く(お蝶)敵(お蝶)が(お蝶)討(お蝶)せ(お蝶)た(お蝶)サ(お蝶)絹(お蝶)夫(お蝶)關(お蝶)て(お蝶)蝶(お蝶)案(お蝶)心(お蝶)仕(お蝶)升(お蝶)た(お蝶)わ(お蝶)い(お蝶)か(お蝶)綾(お蝶)今(お蝶)迄(お蝶)の(お蝶)悪(お蝶)口(お蝶)ハ(お蝶)貳(お蝶)人(お蝶)の(お蝶)衆(お蝶)免(お蝶)して(お蝶)下(お蝶)さ(お蝶)ぎ(お蝶)善(お蝶)私(お蝶)ハ(お蝶)皆(お蝶)様(お蝶)ハ(お蝶)失(お蝶)禮(お蝶)を(お蝶)申(お蝶)升(お蝶)た(お蝶)御(お蝶)免(お蝶)シ(お蝶)被(お蝶)成(お蝶)せ(お蝶)綾(お蝶)其(お蝶)詫(お蝶)に(お蝶)及(お蝶)ぬ(お蝶)雲(お蝶)の(お蝶)戸(お蝶)服(お蝶)と(お蝶)此(お蝶)綾(お蝶)川(お蝶)ハ(お蝶)胤(お蝶)違(お蝶)ひ(お蝶)の(お蝶)兄(お蝶)弟(お蝶)成(お蝶)る(お蝶)ぞ(お蝶)ト(お蝶)素(お蝶)性(お蝶)の(お蝶)詞(お蝶)臺(お蝶)有(お蝶)て(お蝶)善(お蝶)夫(お蝶)で(お蝶)ハ(お蝶)名(お蝶)ハ(お蝶)高(お蝶)と(お蝶)云(お蝶)ぬ(お蝶)ハ(お蝶)絹(お蝶)お(お蝶)位(お蝶)牌(お蝶)の(お蝶)後(お蝶)ハ(お蝶)高(お蝶)と(お蝶)記(お蝶)シ(お蝶)て(お蝶)ム(お蝶)升(お蝶)る(お蝶)善(お蝶)國(お蝶)を(お蝶)出(お蝶)た(お蝶)儘(お蝶)生(お蝶)死(お蝶)知

きねば過古帳へ俗名高と記て置たが綾川關の母御で有た  
り(朝)夫で様子(皆)分り升た(綾)此綾川が出世も不  
動を念下た皆利益(朝)授るも人の一心源爰が日本(皆)と  
神國じやあアト此模様宜敷道具廻る

本舞臺元の内の道具爰(桂)井戸へ入らんとするを(清)  
留る詞臺有て親方と云揃も揃って分らねへ奴だ今柄わし  
が世話をして立派を關取に致し升ト俠客氣取の詞臺有て  
(桂)何分お頼申升ト(下)出桂川さんと私も一所に(清)エ  
化物が連れて行ける物り(下)ア、恨しいト這入(曲)出おの  
とさんが一軸をト渡して這入(曲)コ、ヤ不動の掛物(清)

夫を師匠の筈と思ひ(桂)信心せよとの御教訓ト上手從(綾)  
出(桂)ヤ親方さんがト後へ戻を(清)隔る此模様宜敷幕  
(大切)本舞臺都て成田山水行場の体(鳴)先(弟子)付出  
鳴岩關川と云の(鳴)外でもねへ桂川が親の敵が討たい  
と此成田に斷喉をして居るを幸ひ心らして仕舞ハ骨折代  
いだんまりだ(弟)併斷喉堂の目が多い(弟)水行を行を

の仕返シを仕て遣ハト打叩く(桂)エ、是荒行ハ身体弱り  
現在敵を目前に居乍立合事成らざるト無念の仕打(清)  
今世界ハ神佛を祈禱との間拔な奴サア敵を討れに來  
た程ハ投殺あら殺て見よト蹴返ス(桂)投殺さいで置べき  
ト組付を一寸立廻捨伏られ(桂)エ、口惜イ(鳴)此石が  
持たくば持せて遣ト石動ぬ仕打(瀧)いくぢのねへ奴だト  
力石を持上(桂)の腹へ乗せる是もて苦み落入(瀧)仕打有  
て是が力士の返り討石で止メを差して遣の(鳴)今柄して  
の親分を(瀧)敵と覗う奴もねへト行掛る(桂)瀧見山勝負  
が殘たマア持たト石を抱起上る(瀧)今くたむつた桂川(鳴)  
扱ハ迷ッた(桂)今大願成就し神の利益で蘇生を  
シ試す成田の力石振舞吳んと急度見得(瀧)面白イ勝負を  
する柄松前の今度の場所へ乗込來やれト行を向う從(綾)

(清)出(綾)敵を討さん爲勘當した桂川(桂)スリヤ其爲に  
恭(清)瀧見山殿勝負を仕やれ(瀧)何にもト(清)名乗を  
上(兩人)相撲の立廻り宜敷有てド、(桂)のあむらを當る

待受ト叩合上下へ忍ぶ床の淨瑠璃に成(桂)出我大望も早  
三七日祈れ共此力石の持ぬ内の命限り祈念せんト向う從  
(瀧)出今晚ハ遅く成升た(桂)わしの願込從清吉殿が願  
掛見舞下さる此御恩ハ返シ度が譬にも云老少不定ト思  
入(瀧)ハテむだき心配是も綾川關柄イヤハ綾川關がむご  
くする故意地も成て此か世話(桂)恭ふんる今日が満願  
の當日なせと仕打有てドレ水を浴拜をト升ふ(清)

獨で水が汲るかの(桂)何の釣瓶ハ一杯位ト井戸端へ行  
(清)氣遣ふ仕打上下從(弟)出(桂)組付を一寸立廻見得  
も成(弟)瀧見山關を敵と覗ふ桂川(弟)俺達殺してやる  
(桂)われハ瀧見山が弟子共よ(清)弱身へ附込比與な奴  
(兩人)やつ付るト立廻り宜敷有てド、(清)(兩人)を追て  
這入(桂)行ハ行れぬ此息切ト思入有て南無不動明王得よ  
利益を授ケ給ハト力石に手を掛動りぬ故未だ驗シの有ら  
ざるのト後よて(瀧)其石持せて遣ふト出(桂)ヤ瀧見山  
ト立上るを(鳴)出(桂)を引居(鳴)關取の替りも俺が岡山

手を押へ(桂)此常身で親父を殺したる(瀧)逆手にわらす  
秘密の鉄炮(桂)イヤテンナン具の當迎柔の極意(瀧)夫知  
られたらト切て掛る一寸立廻り(鳴)逃るを(瀧)引付る此  
模様宜敷道具難上る

本舞臺都て黒幕爰(嘉)腹へ突立居る(朝)某へ言譯の切  
腹成る(嘉)何にも貴殿の情にて改心さし今際ハ渡ス此  
一卷(朝)大八が盗取しと思ひし(嘉)サア瀧見山が盗出  
ふりがなしてと願を幸ひ偽物を彼に渡シ夫を則脇坂傳來  
の一巻合點の行ぬハ大八を未だ助ケ置ると(朝)彼の  
力士桂川と云實父の敵を討者われハ孝子の情ハ相互ハ  
見のがし置たり(嘉)我も敵と早首討れよ(朝)南無阿彌陀  
佛ト首を切上手從(桂)瀧立廻乍出(綾)前後を圍  
仕打(朝)桂川の此体ハ(桂)不動の利益ハ授る神力(朝)な  
せ瀧見山を投殺さぬ(桂)只今武度迄投付たれど止メハ  
兄と共に(瀧)宮田様の敵といふハ中村求女(朝)チ、求  
女ハ只今切腹致した傳書を奪ハ妹を殺せし大八最早惡事

ハのがれぬぞ(瀧露顯の上)ト切て掛る立廻つてド(瀧)を切下ケ(桂)天命思ひ(兩人)知つたるト止メを煮是と一時は黒幕を切て落と

本舞臺都て成田山拜殿の体(皆)拜殿を見上ケ(綾)是と云のも明王の(清)尊と利益の敵打(皆)チエと恭ヒト(皆)引張の見得宜敷幕

大切花雲雨鳴鈴 常磐津連中 片岡我童 中村福助 中村芝翫 不破伴左衛門

名古屋山三 山口巴屋のお福 本舞臺すべて吉原仲の町の体茶屋並奥深見せ青藤のき

のれんチ掛櫻の大樹山吹のあまらひ誰彼行燈よて夜櫻のにぎわいすかきにて幕明く(茶や廻り)東方出揚幕へ這

る上り成(伴左衛門)出東より(山三)出花道宜敷所へ留り兩人うけ合せりふ渡り本舞臺へ來り行違ひ思入有て

ドと鞘を當る(伴)山三の鞘をとらい詠ひの鳴物にあり兩

人意氣地のせりふ(山)面を包む目關笠取て貴殿の御面相(伴)やせ浪人のよめたの面と笠と手を掛る(山)賣公の笠もト兩人イザト手を掛立廻り笠を兩人取合を見てさつと成りたがひみ性を名乗り葛城の買論より意根をふくむせりふ渡り白刃を抜き立廻り山口巴のね福好みの形看板てうちんを待出で花道へ來り此体を見て欠來り此中へ這入双方白刃を押は扱へのせりふあつて(山)の白刃を(伴)へ渡シ(伴)の白刃を(山)へ廻し双方取り違ひ思入あつて(福)御所持の鞘へ丸く納まる此場の納(伴山)思これ有て近日ゆるりと立上るを木の頭を并ふ本釣鐘よりなり○是より下の巻太神樂よさわしき所作事よて目出度打出ス

明治十八年四月四日御届

(定價金八錢)

編輯兼

出版人

賣捌所

齋藤長八

日本橋區橋元町一丁目四番地